

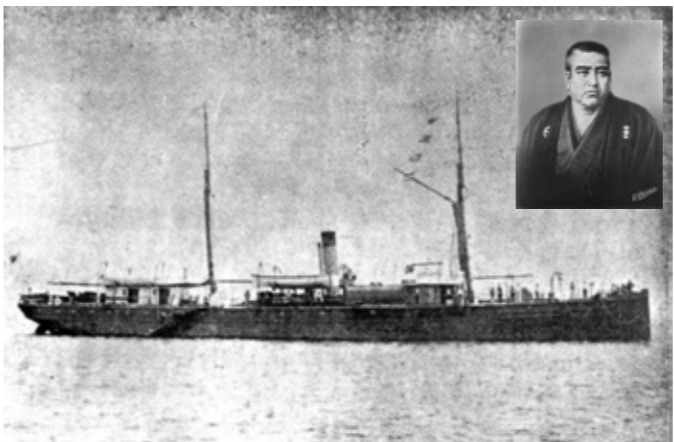
## 西郷どんと長崎

石田 孝

「大河ドラマが始まりましたで、『西郷どんと長崎』を語らいます」

安政時代（一八五四）になり、西郷どんは藩主斉彬に従って初めての東上となる。以来二十回ほどの上京や東上で国元を離れるが、その途中で長崎を何回訪ねたシーンが登場するのだろうか。

西郷どんが人物評価を加えた安政年間の交友録「審察」には、一七九名の冒頭に長崎七人「御宿老 徳見藤四郎」「乙名中川様御用達 石本卯之助」「有志 柴田方庵」「唐通事 高尾和三郎、頼川君平、水戸出入 官梅源八郎」「幕人有志 山本清太郎」が記されている。なお同書発刊者署名にある「止水」とは、安政五年錦江湾入水事件で亡くなった勤皇の僧・月照が、そのちょうど二ヶ月前、



『西郷隆盛と三邦丸』

西郷宛に出した書翰により西郷どんの号であることがわかる。

宿老徳見は、茂四郎または四郎のことで徳見家五代の宗悟である。

乙名石本は、長崎石本家（阿部屋）十代の幸平である。豊後岡藩主中川様は長崎警護の長崎岡藩陣屋の事で、延命寺焼失再建寄進には石本も関わっており、卯之助は薩摩藩出入ともなっている。

有志柴田は、常陸国多賀郡に生まれ、江戸で儒学・漢方を学び、天保二年長崎に移住している。また吉雄圭齋と共に蘭軍医

オットー・モーニツケに牛痘接種を習ったり、ビスケット製造法を水戸藩に伝えるなど普及に尽力している。榎津町に住み、馬田家の柴田大助（のち昌吉、読売新聞社前身の日就社創業者の一人）を養子に迎えている。

安政年間まで長崎を訪ねたことのない西郷どんは、島津斉彬に従って初めて江戸へ行き、庭方役として水戸藩主徳川斉昭のもとで水戸の三田と言われる藤田東湖・戸田忠太夫・武田耕雲齋ら水戸学派の志士達と交流するが、なかでも柴田方庵と同郷出身の日下部伊佐次（のちに薩摩藩士となる）との結びつきが大きいと言える。『柴田方庵日録』には日下部や薩摩藩屋敷間役奥四郎などがよく登場し、唐通事高尾も官梅同様、水戸館出入と記されている。

頼川は、唐通事の履歴を記録した『訳司統譜』の著者頼川君平の先代である。

幕人有志山本は、高島秋帆に西洋流砲術を、山鹿素水に兵学を、広瀬淡窓に儒学を学び、三十歳で長崎に私塾「柿陰古屋」を開き、子弟二百余人に砲術と儒学を教授している。

では西郷どんが長崎を訪れたのはいつなのか。文久（一八六一）の頃より鹿児島と長崎間は陸路ではなく蒸気藩船の往来が主になり、長崎寄港が考えられる。史料などで西郷どんの長崎来訪が解明できるのは四回である。

一回目は、慶応二年（一八六六）薩長同盟締結後、京都寺田屋事件で刀傷を負った坂本龍馬の湯治とお籠さんとのハネムーンを兼ねて、西郷どんや小松帯刀と共に乗船した三邦丸が三月八日に長崎に到着し、二代目長崎県令となる薩摩藩士『野村盛秀日記』に、「三邦丸四半時分著桂家（老）小松家（老）西郷氏吉井氏其他著にて今晚小松家（老）へ差越○岸良彦七外兩人旅舎に止宿」とある。

### 風信

○五月四日 恒例の第十二回「子どもと共に歩く憲法さるく」では天気もよく、また参加者も多く大変盛会でした。有難うございました。

○五月五日は**男の節句**で、たくさんの鯉が中島川や浦上川にも大きな綱が張られて泳ぎ、実になつかしい風景でした。

戦前の長崎地方では「男の節句」は六月五日で、此の日には家々の軒先に菖蒲とフツの葉を束ねた「さし物」三本を搦し、庭には「鯉のぼり」があり、お膳には「唐あく緑」が用意されていました。

○五月八日 三山公替（中国人会）より、五月八日（火）午前十時より「今年の媽祖祭を崇福寺媽祖堂で行うので御参に参加下さい」との事。毎年、本会より五、六人は参加させて戴く。式典は全くの中国式で珍らしい。

○長崎では媽祖を「ぼさ」とよみ、江戸時代、長崎に入港して来る唐船は必ず船の中に神棚を設けて媽祖様を海神として御祀りし「長崎に停泊中は唐寺内媽祖堂に安置しておき……」と、弘化四年（一八四七）長崎今鍛冶屋町角大和屋発刊の「長崎土産」に詳しく記してある。この唐船により入港された媽祖様が港より唐寺に向かわれる行列を「媽祖揚」といい、鳴物いりの大変にぎやかな行列で「街中おおいに沸きたつ」と記してある。

○五月十六日（水）午後六時より第十三回長崎検定一級合格者認定書贈呈式と勉強会を行うので出席するようにとの事。今年の一級合格者は三十二人受験のうち二人のみであった。

○今月ご寄贈いただいた書籍  
一、赤瀬浩氏（長崎学研究所長）より、自著の長崎最後の長崎奉行「河津祐邦」（長崎文献社刊・一五〇〇円＋税）本の内容は幕末動乱期の長崎、浦上四番崩れ、イカルス号事件、最後の長崎奉行退去等、未知の史料が多く一読必要の論考でした。

一、長崎歴史文化博物館より「研究紀要第十一号」添田仁氏の長崎居留地の事、岡本健一郎氏の「対馬藩長崎屋敷の事」他、長崎学の研究上すべて一読しておくべき研究考でした。  
一、長崎市長崎学研究所より「長崎学紀要 第二号」岩崎義則氏、平岡隆二氏、藤本健太郎氏他多くの論考あり。前号に引き続き保存すべき資料でした。

二回目は、同年「神無月十六日今日も走り通し日入頃長崎湊へ著船（乗頭）川上（左太夫）氏と上陸の処御邸（銅座薩摩藩蔵屋敷）連中皆茂木へ差越され留守にて：箱屋（永見）に差越し相話居候処に図らんや小松家（老）西郷氏杯明朝三邦丸より御著の思ひ込へ御出相成宿手当等大混雑にて候事九過宿に帰る。」となっている。

西郷作の七言絶句「慶応丙寅十月上京船中作」の中に「連歳危きに投ず十月の天 黒烟南北火船を飛ばす 朝威奮わず奸計を縦にす 身は丹楓となつて散帝辺散ぜん」があり、またジョン万次郎に随行して来崎した土佐藩士『池道之助日記』の同月十七日にも「今宵薩州の三邦へ仲濱行に付、余、與惣次三人行。此船に小松と申す御家老、人数四百人召連、京都へ行けるよし。」とある。

三回目は、明治五年六月十四日―十七日「明治天皇西国行幸」の供奉長としての来崎であるが、『巡幸日誌』担当の宮内省児玉愛二郎少丞の二十余年後の『随幸私記』によると、「御召艦龍驤は艦底が深かったので満潮時でないとう入港できず、一〜二時間遅れたため供奉長西郷が艦長伊東祐磨と傍に居た海軍少輔川村純義を怒鳴りまくった。小西郷（従道）は近くでニコニコ笑っていたが、天皇はこのことをよく覚えておられて後年「長崎の喧嘩はひどかったなあ」と仰せられた」とのことだが、御召艦が暗礁に乗り上げたとか、乗り移った端船にあった西瓜を滅多切りにしたとか誇張吹聴されているようである。この時の絵画が、長崎市寺町の老舗料亭「一力」の長男で洋画家・山本森之助遺作の「中国西国巡幸長崎御入港」図で明治神宮外苑聖徳記念絵画館にある。

四回目は、「明治六年の変」で敗れ下野する時の西郷家使用人矢太郎談で、「十月二十八日東京を発ち：長崎に出て茂木港より乗船阿久根に舟を着け上陸市来湊に一泊して十一月十日に武屋敷に帰る。」との事から、長崎に来たのは十一月七日前後である。

西郷どんはこれ以後、君臣水魚之交の明治天皇からの再出仕要請の勅使を毎年迎えながらも、西南戦争まで故郷鹿児島を出ることはなかった。「ここあたいで終わらぬぞ」

（鹿児島県人会会員）

